

71 (平均 52.6) Gy で, PEP, 5FU 系を併用した。

結果: 臨床一次効果: 温放化群では CR4 (25%), PR7 (43.8%), NC5 (31.2%) で, 奏功率は 68.8% に対し, 放化群では CR0 (0%), PR4 (36.4%), NC7 (63.6%) で, 奏功率は 36.4% であった。累積頸部制御率は温放化群では 1 年, 2 年 6 カ月ともに 43.8% に対し, 放化群では 1 年, 3 年ともに 9.1% であった。

以上, 放射線化学療法に温熱療法を加えることにより治療成績の向上が認められた。

A-8) 当科における口底癌患者の臨床的検討

高田 真仁・五島 秀樹  
鈴木 克也・野村 務 (新潟大学歯学部)  
新垣 晋・中島 民雄 (第一口腔外科)

1975 年 4 月から 1995 年 12 月の 21 年 9 カ月間に当科を受診した口底癌 22 症例について臨床的に検討を行った。初診年齢は 38 歳から 79 歳までで平均 61 歳。性別は男性 20 例, 女性 2 例。T 分類は T1, 1 例, T2, 12 例, T3, 1 例, T4, 8 例。N 分類は N0, 5 例, N1, 11 例, N2b, 2 例, N2c, 3 例, N3, 1 例であった。M 分類は全例 M0 であった。組織学的には全例扁平上皮癌であり, 臨床病期については, Stage II が 5 例, Stage III が 7 例, Stage IV が 10 例であった。主たる治療として外科療法が行われたものは 16 例, 放射線療法が行われたものは 4 例, 2 例は化学療法のみが行われた。予後は術後経過良好なものが 13 例, 原発巣再発が 4 例, 頸部転移が 1 例, 遠隔転移が 1 例であり, 他臓器癌の発生が 3 例にみられた。Kaplan-Meier 法による 5 年累積生存率は 66.1% であった。今回, 口底癌の治療による後遺障害と外科療法における再建手術について重点をおいて検討した。

A-9) Doxorubicin 投与終了 317 日後に心不全を発症した乳癌患者の 1 例

相場 恒男・岡田 義信  
今井 洋介・佐藤 幸示 (県立がんセンター)  
堀川 紘三 (新潟病院内科)  
牧野 春彦・佐野 宗明 (同 外科)

症例は 67 歳, 女性。既往に心疾患はない。1985 年に右乳癌の切除術を受けた。肺転移が認められたため, 1985 年 11 月 25 日から 1994 年 11 月 11 日まで Doxorubicin (DXR) を 1 回 19~28 mg/m<sup>2</sup>, 計 32 回, 累積 644 mg/m<sup>2</sup> と Cyclophosphamide, 5FU などが投与された。1995 年 7 月から下肢浮腫が出現。8 月から呼吸困難を自覚する

ようになり, 増悪したため, 9 月 27 日に左心不全の診断で入院した。心エコー図で左心室の拡大とびまん性の壁運動低下が認められた。他に原因が考えられず, DXR による心筋障害と診断した。DXR の投与終了後 317 日が経過していた。近年, 小児科でアントラサイクリン系薬剤 (ATC) を中止後, 数年以上経過してから心不全が発症する遠隔期の心不全が問題になっているが, 成人で ATC を投与後 317 日も経過してから心不全が発症する例は極めて希である。当院での過去 7 年間の ATC による心不全発症 15 例をあわせて検討して報告する。

A-10) 27 歳女性に発症した乳腺原発血管肉腫の治療

吉田 崇・家里 裕  
小林 功・大矢 敏裕 (小千谷総合病院)  
落合 亮・横森 忠紘 (外科)

患者は 27 歳女性で, 1994 年 5 月頃より左乳房の腫脹に気付くが痛みなく放置していた。1995 年 5 月腫脹は乳房全体に広がり, 熱感及び疼痛が出現し当科を受診した。腫瘍は左乳房全体に及び乳頭周囲の皮膚は暗赤色に変色して乳腺炎様であった。マンモグラフィ, エコーでは乳腺炎との鑑別が明らかではなかったが, 穿刺吸引で血液を大量に吸引したため, 乳腺原発の血管腫または血管肉腫を疑い, 生検を施行した。病理組織学的検査で血管肉腫と診断され, 6 月 26 日非定型的乳房切除術 (Brt + Ax) を施行した。切除標本で腫瘍は 12×9×3.5 cm 大で, 断面は血液の充満した腔と充実部から成っていた。リンパ節転移は陰性であった。術後補助療法として IL-2 製剤 70 万単位/日を 10 日間投与し, これを 3 コール施行した。術後 6 カ月の現在再発の徴候を認めていない。今後も外来にて IL-2 製剤の投与を施行する予定である。

A-11) 直腸癌の術後仙骨前方部再発に対する放射線治療

高野 徹・末山 博男  
伊藤 猛・杉田 公 (新潟大学放射線)  
益子 典子・酒井 邦夫 (医学教室)

1984 年より当科で治療した直腸癌の術後仙骨前方部再発 10 例において, 治療方法およびその成績について retrospective に検討した。

対象症例は 50~79 才 (平均 63 才) で, 初回手術後から再発までの期間は 3~81 カ月 (平均 25 カ月), 遠隔転移